



恋人に呪わ

れて転生したけ

ど男に抱かれる

のは御免だ③

V S勇者・2ランド①

旅の道中、木木が鬱蒼とした広大な森で迷ってしまった。

俺が足を滑らせ、そのまま土の柔らかい斜面に引きずられてしまい。すかさず手首をつかんだ勇者も道づれに、かなりの高さ进行落ちていった。

さいわい、擦り傷以上の怪我を負わず。ただ、顔を上げてても格闘家と白魔導師は見えないで、声も届かないほど、はなればなれに。

半日、探しまわっても合流できないまま、日暮れ近くになった。

日が落ちた暗い森で、白魔導師のような魔法でサポートしてくれる人抜きで、二人だけでうろつくの危ない。

との判断で、野宿する場を探して、魔物が出現しやすい夜を迎えるための準備をしていたら。

火にかける乾いた小枝を集めている途中で、足をくじいた女の黒魔導師と遭遇。

ぼんつきゅっぼんのナイスバディに、水着のような露出度が高い装束、ロングブーツ、マント、三角帽子。

おまけに眼鏡。

と、ゲームのいかにも男受けを狙った「戦闘に不向きすぎだろ」とツッコみたくなるような、非現実的な風貌の美女キャラだ。

前世の俺なら、うつほほーいと手放しで歓迎して「ワンナイトだけでも！」と下心を疼かせるところ。

前世の恋人に呪われた哀れな身とあつては、豊満な胸の谷間にも、張りのある半ケツにも股間はしーん。

分かりきったこととはいえ「呪いがなければ・・・」と悔しいからこそ、フェロモンむんむんな美女を前にして、やるせないったらない。

まあ、俺がやきもきしたところで、どうせ黒魔導師からしたらアウトオブ眼中。

彼女のほうが下心剥きだしに、勇者をガン見ロックオン中だ。

そりやあ、勇者はモテる。

肩書を知っただけで、目の色を変えて群がる女がわんさか。

おまけに、金髪に青い瞳をした白馬の王子様のビジュアルとなれば、
どれだけの女が心を撃ちぬかれるやら。

人懐こい、温厚、情け深い、紳士と人柄も申し分なく、お人好しで、
すこし抜けているときたもんで隙がない。

踊り子もイケメンでセクシーとはいえ、勇者のような完全無欠、正真
正銘の男前がそばにいと「半端だなあ」と自分でも思うほど、見劣
りしまくり。

女遊びをやめてからはとくに、色男ぶりは鳴りをひそめて、今や冴え

ないモブキャラ扱い。

前にモテていたのにしろ、体目当てや、勇者目当てだったのかも。

まあ、ちゃらんぽらんな遊び人は、所詮、絶対的主役な勇者の引き立て役。

といって、そのことが不名誉だと齒ぎしりはしない。

勇者と自分を比べて「神よ・・・」と嘆くことはあっても、雲泥の差があれば、やつかむのも馬鹿らしくなる。

前世の俺の記録、五股を超えたら、多少はもやするかもしれないが、あの勇者だし。

サイコパスな一面もありつつ、表向き、白魔導師一筋だし。
フェラをするのも、俺限定のようだし。

てなわけで、エロ美女黒魔導師にガン無視されても気にすることなく「まあ、せいぜいガンバレや」と冷めていたほどだが、意外なことに勇者のほうが調子を狂わせた。

とくかく、俺から一時も放れない。

トイレにまでついてきて「赤ちゃんか！」とツッコんだほど。

豊満な胸を見よがしに突きだし、あざとくアップローチしてくるのに、俺を盾にして、顔を半分覗かせ、猫のように警戒。

「ねえ、そう思いませんかあ？」と背中を覗きこみ、声をかけられても「そうだなあ。キーはどう？」と必ず、俺に仲介をさせ、直接、受けこたえせず。

どれだけ世の人人がもてはやす、ご立派な勇者といっても、高校生くらい
の年となれば初心。

色っぽい大人の女を前に、照れちやつて、まごついちやつてかわいいー。
とは思わない。

幼少から容姿端麗さを「天使」と賞賛されていた勇者は、女慣れして
いて、対応も心得たもの。

だから、これまで数えきれないほど云いよられ、誘惑されてきたもの
の、変な女に引つかからず、トラブルも起こさなかった。

そばで白魔導師が（笑っていない目で）にこにこしていたのも、利い
たのだろう。

鉄壁虫除けのような白魔導師の不在が、勇者を不安定にしているのか。

それにしても「初心というか、人見知りしだした幼子みたいじゃね？」と釈然としなかったのが、すぐに謎は解けた。

V S 勇者・2ラウンド②

俺と勇者が食材さがしからもどったとき。

「おかえりなさい！」と急に立ち上がった黒魔導師が、くじいた足に痛みが走ったようで、倒れそうに。

すかさず俺が豊満な胸ごと受けとめて、だいじには至らなかったものを、その直後。

これまた急に勇者がすっころんで、地面に突っ伏し、涙目で俺を見上げたもので。

その瞬間、ぴんときた。

「俺を奪いあっているつもりで、こいつ、黒魔導師と張りあっているのか！」と。

黒魔導師が勇者狙いなのは明らかだけれど、そう客観的に見れないほど「キー余所見しないで！」と頭に血を上らせているか、焦っているらしい。

いやいや、仲間の一人、格闘家と前から同じ対立構造になっているが！？

格闘家との浮気には、まったく気づいていないのか。

黒魔導師はだめでも格闘家はいいのか。

そこらへんの勇者の真意はさておき、そういえば、と思う。

女遊びをやめてから、白魔導師以外の女と縁がなかったなど。勇者のイケメンオーラにかすんで「はんっ、チャライ踊り子なんて」と見向きもされなかったのと、呪われた身なのが悲しくて、俺のほうも避けていたのかも。

で、俺が踊り子として転生してから、これほど長時間、女と共にいるのは、ほぼ初めて。

勇者にしても、久しぶりに俺と女が接するのを目にしたはずで、その光景にとり乱しているのなら・・・。

そう、勇者はかつての格闘家のような心理に陥っているわけだ。

「勇者の顔に泥を塗るな！」とつつかかってきた格闘家には、隠れた本音、俺が遊ぶ女への嫉妬があった。

今の勇者の場合は、嫉妬というか「また女遊びを再開するのでは？」との不安。

「彼女にキーがとられちゃう！」との危機感に追いつめられているのだらう。

「く・・・！世の女をすべて落として、スーパーハーレムも作れるだらう、天下のモテ勇者がなんちゅう、いじらしい・・・！」

うかつにも胸をときめかせつつ、勇者の心境を理解したならば、早早に対処したもので。

それまでは黒魔導師の顔色をうかがい、協力はせずとも、機嫌をそこなわせないよう、勇者との間をとりもっていたのは中止。

馴れ馴れしくせず、そっけなくもせず、その中間の加減でやりとりをし、必要もなく近づかず、話しかけず。

ビジネスライクに接したつもりが、黒魔導師には、なにか勘づかれたらしく、途中から俺を睨みつけるように。

「運命って不思議ですよねえ。

わたしが一番はじめに勇者さまと会えていたら、踊り子さん、今ここはいなかったかもしれないですねえ？」

「そろそろパーティーの入れ替えをしてもいいんじゃないですかあ？能力の低い人にぬけてもらって、有能な仲間を迎えきれないと、魔王には勝てませんでしょうしい。」

あ、べつに踊り子さんと私のこと、云っているんじゃないですよお？」
会話中になにかと、ちくちく針で突くようなイヤミ攻撃もしてきやが
って。

急所をついてくるから、ぐうの音もなかったものを、とはいえ逆効果
で、勇者をむっとさせていたが。
おかげで「キーはあげないんだから！」と神経をとがらせなくもなっ
たし。

俺と黒魔導師が親しくするより（俺は敵視していないが）いがみあう
ほうが、安心できるのだろう。

俺にしたら、いい迷惑。

筋ちがいには八つ当たりされまくったものだが、ケンカを買うことなく、無抵抗にサウンドバックに甘んじた。

ただでさえ、団結している勇者一行の実態は、修羅場一歩手前なのだ。これ以上、問題を持ちこみたくなく、一応、白魔導師の顔も立てないと。

「この味噌つかすのせいで、勇者さまとお近づきになれなかった！」と恨まれて上等。

そうして俺が悪者になれば、お高くとまった黒魔導師のプライドを傷つけないで済むし、勇者の株も下げないし。

などなど考えを巡らせつつ「いやいや、決して勇者のためじゃねーし！」と自分で自分にツッコみつつ、目障りな邪魔者役に徹して、な

んとか就寝までこぎつけた。

